

ミャンマーの地で、いのちと向き合う

(原文)

野中 優那 (14 歳)

日本<ミャンマー在住>

在ミャンマー大使館付属ヤンゴン日本人学校

私はいま、ミャンマー行きの飛行機の中でこの手紙を書いている。

あなたは覚えているだろうか。2020 年、春節で賑わう中国の武漢から始まった新型のコロナウィルスは、世界中に感染を広げ、多くの死者をだすことになった。

当時、ミャンマーのヤンゴンに住んでいた私たち家族にも、その影響は及んだ。タイ、シンガポール、ベトナム、マレーシア等にも感染は拡大し、近隣諸国は一斉に都市封鎖措置をとり始めた。国境、空港が次々に閉鎖されていくのを前に、何万人もの出稼ぎ労働者たちがバスや列車で帰国していく。しかし故郷は彼らを快く迎え入れることはできなかった。なぜなら脆弱な医療体制の中、ウィルスが蔓延すれば国家が危機に陥るからだ。

政府は国民に自粛を求め、飲食店は閉鎖された。あらゆる場所で検温が実施され、感染者は隔離病棟に集められた。とはいえ設備が整っているわけではない。毎日配信される大使館からの情報で、私たちは身近に危険が迫っていることを感じていた。

4 月半ば、ミャンマーは新年を迎える。ヤンゴンの空はどこまでも深く青い。色とりどりの花が咲き、街は大勢の人で賑わう。例年、水掛祭りと呼ばれる新年のお祝いは、ミャンマー人にとって、1 年で最も華やかで大切な行事である。その日を待たず、私たちは日本に一時退避した。

日本人学校の先生、ミャンマー語の先生、豎琴の先生、レジデンスのスタッフや、ドライバーさん、よく行く店の店員さんたち。誰もが、「ヤンゴンに戻ってくるのを待っているよ」「日本も感染者が増えているから身体に気をつけて」と、見送ってくれた。

私には帰る国がある。日本は物資が豊富で環境が整備され、最新の医療を受けることができる。しかし、彼らはインフラも衛生面もまだ十分に整っておらず、医療が脆弱なこの国で生きるしかない。

空港に向かう車窓から、ヤンゴンの街を眺める。黄金のパゴダ、人々の暮らし。すべてが美しく尊い。貧しくもたくましく生きるこの国の人々の穏やかな日常が、どうか守られますように、と心から願った。

新型ウィルス収束後の世界は大きく変わった。世界が情報を共有することで、途上国の医療も目覚ましく発達した。ミャンマーも例外ではない。

2030年、ミャンマーは軍事国家から連邦共和国になり20年が経つ。日本は長年、ミャンマーの教育制度変革に貢献してきたが、教育制度が整い、児童労働者が減り、僅か14%だった高校の卒業率は大きく上がり、大学進学する若者も増えた。

若者たちは発展した教育環境の下、自分で考え、行動できるようになった。もちろん医療の道を志す人も少しずつ増えている。ただ先進医療にアクセスするためには、海外の大学に進学するしかない。

そんな彼らのために、医学を学ぶための大学が設立された。支援国には日本は勿論、フランス、ドイツ、中国、そして長く対立関係にあったアメリカなどが参加し、諸外国の叡智が集結した。私はそこで現地のミャンマー人学生のサポートの仕事をするようになった。

医療が脆弱な国はミャンマーだけではない。私の仲間は、アフリカやインドでも同様のプロジェクトに参加し、奔走している。

2020年に生きるあなたには、これから変わっていく世界に関心を向けて欲しい。しかし、変わらないものがあることを決して忘れてないで。家族や友達を大切にすること。目の前にいる人と真摯に向き合うこと。

医療が脆弱な国に生きることは、そんな当たり前の日常が奪われるということだ。

私は今まで、人々の幸せと健康について考え続け学び、多くの人の話を聞いてきた。そしてこれからも、ミャンマーや世界の人々と共に、対話を続けていく。